

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25283015

研究課題名(和文)大日本帝国のなかの先住民「比較先住民学」のための基礎研究

研究課題名(英文)Indigenous peoples in Japan before 1945 - the fundamental research for "comparative study of indigenous peoples"

研究代表者

李 建志 (LEE, Kenji)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：70329978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者は、先住民に対する行政の問題と、日本陸海軍の将校たちの思想が、支配者の立場と支配される立場というかたちで交差することに気づき、朝鮮半島出身の陸軍幹部であった李垠などを中心に、この時代について分析することへと傾斜していった。その際、島村氏、上水流氏、齋藤氏との意見交換や研究会などでの密接な問題意識の共有と、その成果発表としての論文発表などが、相互にとってきわめて有効に働いたことはいうまでもない。研究代表者の成果に限ってという近い将来に単行本として刊行される原稿を書きためていた。その分量は400字詰め原稿用紙にして1000枚にのぼっている。これは必ず出版する。

研究成果の概要(英文)：Our study team knew that the government officers and the commissioned officers of the Japanese Empire controlled indigenous peoples in Japan, for example Aynu, Okinawans, indigenous Taiwanese, and Micronesian Islanders. Especially, we remarked the commissioned officers had governed them by military thought. Because the Japanese military had particular thought on the indigenous peoples. So I studied the indigerous peoples stand in Japanese Empire by the Colonial Koreans stand. Korea was a colony of Japan before 1945 for 36 years but the King of Korea was a quasi-emperial family in Japanese Empire, also the King of Korea, Ewn Lee, a general of Japanese Empire. Therefore we made him a viewpoint to analyze indigenous peoples, because he was a unique position, a top of the military, a top of the government officer and a colonist in Japanese Empier. Now I have written some papers of this study, will publish them in this autumn.

研究分野：比較文化論

キーワード：比較文化 表象文化 民俗学 先住民 文化人類学 観光学 文化研究 社会学

## 1. 研究開始当初の背景

日本がかつて植民地帝国だった時代、「外地」として多くの国や地域を支配していた。そのため、日本語を解さない人びとが大量に帝国内部に取り込まれることとなった。本研究では、この際に日本国内へと取り込まれた国、地域などにいた、いわゆる「先住民」について調査研究を行うことを目的としてはじめられた。

## 2. 研究の目的

各研究者が問題意識を持って調査したことを発表しあい、相互に問題意識を確認しあうことを目的としている。そのうえで、本研究で問題になっている日本(ヤマト)のひとが南洋や北海道などを開拓したときの「開拓する」側の論理と、開拓された土地にもともと住んでいた人々の関係性を掘り下げていると考えている。

北海道は「開拓」ということばでより多く語られるが、これらの記憶は、アイヌという先住民を無視した考え方、すなわち「和人」が北海道を住める場所に拓いたという記憶を共同化する装置として機能している。このような「開拓の記憶」は、何も北海道に限らず、満州や南洋でもくり返されるのだが、この記憶のあり方の比較や、やはり開拓ということばで無視される先住民としては全く同じではないものの、台湾原住民の表象問題ともリンクしているといえるのではないかと考える。

## 3. 研究の方法

研究目的を果たすため、まずはこの「開拓の記憶」の裏に潜んでいる「未開の大地」という意識について、全体で研究活動を行ってきた。具体的には、民俗学の島村氏は、日本国内の沖縄や各地域の少数者についての分析を分担し、上水流氏は人類学の立場から台湾の原住民や沖縄、そして対馬のような境界線上にある地域の基礎的な調査を行った。

また研究代表者である李建志は、文献渉猟という部分に活動を傾斜させた。さらには、齋藤氏も観光学という立場から、先住民の衣服の問題や、いわゆる社会階層問題などをテーマとして、その上で言語に関わる問題を提起してきた。

## 4. 研究成果

研究方法で触れたように、各研究者は、それぞれの領域で研究発表をし続けてきた。研究代表者も、文献渉猟のとどまらず、例えば日本の「外地」であった朝鮮という立ち位置から、日本の先住民問題を考えるという問題意識を抱くようになった。

具体的には、先住民に対する行政の問題と、

日本陸海軍の将校たちの思想が、支配者の立場と支配される立場というかたちで交差することに気づき、朝鮮半島出身の陸軍幹部であった李垠などを中心に、この時代について分析することへと傾斜していった。

その際、島村氏、上水流氏、齋藤氏との意見交換や研究会などでの密接な問題意識の共有と、その成果発表としての論文発表などが、相互にとってきわめて有効に働いたことはいうまでもない。

研究代表者の成果に限っていうと、決して発表した論文数は多くないが、その代わりに上記のような問題意識の発展として考察している問題があり、未発表ではあるが近い将来に単行本として刊行される。その分量は400字詰め原稿用紙にして1000枚、A4版にして300枚弱にのぼっている。これは必ず出版する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

島村恭則、What is Minzokugaku?: An Introduction to Japanese Folkloristics、Munchner Beitrage zur Volkskunde: The men und Tendenzen der deutschen und japanischen Volkskunde im Austausch46号、pp18-32、2018年(査読有)

上水流久彦、近代建築物にみる沖縄の近代化認識に関する一試論 琉球・沖縄史の副読本にみる歴史認識を踏まえて、白山人類学21号、pp37-58、2018年(査読有)

齋藤由紀、階層が人間に与える影響～ドラマ「マナーハウス 英国初 貴族とメイドの90日」を通して～、異文化コミュニケーション研究10号、pp1-20、2018年(査読有)

島村恭則、「民俗学」是什麼(「民俗学」とは何か) 文化遺産46号、pp59-65、2017年(査読有)

上水流久彦、中華民国の台湾化にみる金門の位置づけに関する一考察、アジア社会文化研究18号、pp65-88、2017年(査読有)

Takanori, SHIMAMURA、Folklore in the Midst of Social Change: The Perspectives and Methods of Japanese Folkloristic、Japanese Review of Cultural Anthropology 18巻1号、pp191-220、2017年(査読有)

Takanori, SHIMAMURA、What is Minzokugaku?: An Introduction to Japanese Folkloristics、Kwansei Gakuin University School of Sociology journal128号、pp85-97、2017年(査読有)

島村恭則、グローバル化時代における民俗学の可能性、アジア遊学215号、pp217-231、2017年(査読無)

島村恭則、民俗研究とは何か、日常と文化4号、pp175-185、2017年(査読有)

島村恭則、フォークロア研究とは何か、日常と文化 4号、pp225-1237、2017年（査読有）

上水流久彦、観光化確立地域性名牌の方法～瀬戸内海飛鳥5島の観光立島為例、世新日本語文研究 8号、pp1-27、2016年（査読有）

島村恭則、民俗学の研究動向と方言研究との接点、方言の研究 2号、pp151-163、2016年（査読有）

上水流久彦、The way history is told in Taiwan: reassessing a survey in Taipei., Notadam39号、pp89-98、2015年（査読有）

上水流久彦、台湾人のパラオ観光からみる観光研究の展望、日本オセアニア学会 NEWSLETTER110号、pp1-11、2014年（査読有）

島村恭則、フォークロア研究とは何か、日本民俗学 287号、pp1-34、2014年（査読有）

李建志、「兵隊やくざ」論序説、関西学院大学先端社会研究所紀要 11号、pp27-46、2014年（査読無）

〔学会発表〕(計 28 件)

島村恭則、日本“都市民俗学”興衰与当代型、城市化進程与文化多様性学術研討会(「都市化と文化の多様性」シンポジウム)(招待講演)(国際学会) 2017年

島村恭則、ICH 以前、以后、以外、第二屆農耕文化遺産と現代社会(招待講演)(国際学会) 2017年

島村恭則、何謂民俗学?( Vernacular Studies )、上海民間文芸家協会民俗理論沙(招待講演)(国際学会) 2017年

島村恭則、基調報告・民俗学とは何か、第 69 回日本民俗学会年会(招待講演) 2017年

島村恭則、民俗学とは何か、第 38 回実践民俗学会学術大会(招待講演)(国際学会) 2017年

島村恭則、社会変動・生世界・民俗 民俗学の基礎理論、第 37 回実践民俗学会学術大会「再び、民俗学の実践を問う」(国際学会) 2017年

島村恭則、民俗学とは何か 多様な姿と一貫する視点、長野県民俗の会平成 29 年度総会(招待講演) 2017年

島村恭則、「伝承」とのつきあい方、第 24 回宮古島の神と森を考える会シンポジウム「新里の神・人・自然」(招待講演) 2017年

上水流久彦、台湾の古蹟にみる台湾の歴史認識～他地域との比較から、日本台湾学会第 19 回学術大会、2017年

上水流久彦、近代建築物にみる沖縄の「近代化」認識に関する一試論、第 10 回白山人類学会フォーラム「モノと人の移動にみる帝国日本 - 記憶・近代・境域」, 2017年

島村恭則、シンポジウム総括「落日」を超えて 民俗学の将来像、シンポジウム「落日の中の日本民俗学」を超えて 京都で考える民俗学のかたち、於京都市職員会館かもがわ(京都府京都市)、2016年12月03日

上水流久彦、新たな「日本」研究の場としての台湾、2016年世新 60「日本学」国際学術研討会(国際学会) 於世新大学(台湾・台北市)、2016年11月05日

島村恭則、Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany., What is “Minzokugaku”? : An Introduction to Japanese Folkloristics. (国際学会) 於ミュンヘン大学(ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン)(ドイツ・ミュンヘン市)、2016年10月28日

上水流久彦、台湾の中国人観光客を巡る観光の政治学 ネーションなのか、日本文化人類学会第 50 回研究大会、感情なのか、於南山大学(愛知県名古屋市) 2016年05月29日

上水流久彦、萬華、廣島、與那國：人類學者參與建構的「日台關係」、国際シンポジウム(中央研究院民族学研究所主催)『公共人類學的 未來挑戰：「參與/共做」方法論的可能』(国際学会) 於台湾・霧台魯凱族文物館、2015年12月20日

上水流久彦、台湾の日本植民地期の建築物にみる歴史認識 韓国・旧南洋群島を補助線として、日本植民地研究会秋季研究会、於立教大学(東京都豊島区) 2015年11月21日

上水流久彦、台湾の植民地期建築物をめぐる植民地経験の多相化 韓国・旧南洋群島との比較から、日本文化人類学会第 49 回研究大会、於大阪国際交流センター(大阪府大阪市)、2015年05月30日

島村恭則、民俗学と方言研究との接点、日本方言研究会(シンポジウム：方言研究の過去・現在・未来) 於甲南大学(兵庫県神戸市) 2015年05月22日

島村恭則、「複数形人類学(民俗学由来)」へ：Anthropologies with strong background in Folkloristics 現代民俗学会第 26 回研究会「二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先 グローバルでローカルで複数のフォークロア研究へ」、於東京大学東洋文化研究所(東京都文京区) 2014年12月21日

上水流久彦、台湾人の八重山観光、日本台湾学会第 12 回関西西部会研究大会、於神戸学院大学(兵庫県神戸市) 2014年12月20日

①島村恭則、ヴァナキュラー・トラディション・通時的リフレクション、第 66 回日本民俗学会年会、於岩手県立大学盛岡短期大学部、2014年10月13日

②Takanori, Shimamura, Folkloristics as the vernacular anthropology: activities of the society for researching deity and forest of the Miyako Island.、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014、於幕張メッセ(千葉県千葉市) 2014年05月18日

②③上水流久彦、八重山と台湾との境域にみる記憶の継承 「空間」と「場所」、「中央」と「周辺」のせめぎ合い、日本文化人類学会第48回研究大会、於幕張メッセ(千葉県千葉市)、2014年05月17日

②④李建志、娯楽映画のなかの排除と包摂から見えてくるもの 昭和のメディアミックス『兵隊やくざ』を中心に、関西学院大学先端社会研究所全体研究会(兵庫県西宮市)、於関西学院大学先端社会研究所、2014年03月08日

②⑤島村恭則、台湾におけるクレオール現象と日本統治、日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム「世界のなかの日本 世界のなかの日本語」、於富山大学人文学部(富山県富山市)、2013年12月08日

②⑥上水流久彦、台湾の近代遺産にみる重層的歴史経験 - 韓国・旧南洋群島を補助線に、こりあんコミュニティ研究会、於大阪市立大学都市研究プラザ(大阪府大阪市)、2013年12月05日

②⑦島村恭則、宮古島フォークロア研究の新しい視点 創造性とアイデンティティをめぐって、宮古島の神と森を考える会(招待講演)、於伝承文化研究センター(沖縄県宮古島市)、2013年11月23日

②⑧ 島村恭則、フォークロア研究(folkloristics)とは何か 『民俗学』を再定義する、第65回日本民俗学会年会、於新潟大学(新潟県新潟市)、2013年10月13日

〔図書〕(計3件)

上水流久彦、村上和弘、西村一之編『境域の人類学 - 八重山・対馬にみる「越境」』、風響社、総頁数474、2017年

上水流久彦、『東アジアで学ぶ文化人類学』、昭和堂、総頁数254、2017年

齋藤由紀、李建志『京都の町家を再生する家づくりから見えてくる日本の文化破壊と文化継承』、関西学院大学出版会、総頁数244、2015年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等(なし)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 建志 (LEE, Kenji)  
関西学院大学・社会学部・教授  
研究者番号：70329978

(2) 研究分担者

島村 恭則 (SHIMAMURA, Takanori)  
関西学院大学・社会学部・教授  
研究者番号：10311135

上水流 久彦 (KAMIZURU, Hisahiko)  
県立広島大学・社会連携センター・准教授  
研究者番号：50364104

齋藤由紀 (SAITO, Yuki)  
大阪国際大学・国際教養学部・准教授  
研究者番号：50233846